

日本の農業を守る次代の担い手を育成 周辺産業の拡大で、文化の継承も展望

◇ 多くの研修生が学ぶ札幌郊外の拠点

国道二三〇号線を札幌市中心部から南下し、小金湯温泉近くの左手に、「NPO法人農業塾風のがっこう」と書かれた紫色の看板がある。定山溪に向かう山あいの地区と思っていた場所が、車を降りてゆっくり歩くと、果樹畑の奥に何枚もの田んぼや畑が広がっていた。ここで毎日朝から夕方まで三〇人の研修生が農作業に励んでいる。田植えが終わったばかりの田んぼ、手作業でマルチを

張って丁寧に植えられた野菜の苗、いずれも研修生が丹精込めて育てている。

今年度は、厚労省の緊急人材育成・就職支援基金事業の中でNPO法人北海道ふるさと回帰支援センターが実施している「農業による街づくり人材養成科」の研修を受け入れている。栽培から流通までを座学と実習で学ぶのが特徴だ。農業未経験で、将来、農産物の栽培や販売で自立したい人や農業生産法人などで働きたい人を募集したところ、定員の倍以上の応募があり、幅広い年齢層の研修生を選抜した。農業への関心は高く、本気で農業に挑戦しようと考えている研修生が多い。

さらに、札幌市による緊急雇用創出推進事業としてNPOに委託して実施される「都市型農業人材育成・研修」の受け入れも決まっている。

◇ 持続的な担い手育成に向けた環境整備

農業塾風のがっこう専務理事の長谷川豊さんは、長く農業高校の教員、校長をつとめ、日本の農業の変遷をつぶさに見てきたことから、農業における人材育成に人一倍強い思いを持ち、とにかく担い手を育てようと、二〇〇四年に伊達で農業後継者や就農希望者のためのNPO法人として農業塾風のがっこうを設立した。農業高校で教えていた

一九七〇年代
水田の休耕減
反政策が始ま
り、農業の跡
継ぎをする子
弟が減り、農
業高校の生徒
数も減り活気
がなくなった。

そして、政府
の食糧管理制
度に頼ってい

た米の価格の自由化がすすむとさらに農業者が減り、耕作放棄地が増えていった。長谷川さんは、日本の農業を守るために、農業を志す若者を育てることが何より大事だと考えた。それまでの経験を活かし、長い間あためていた計画を実現した。当初は、伊達で自らが経営する農業生産法人や岩見沢などの農場を中心に研修をおこなっていた。NPOの会員は、高校や大学の先生、農業者、公務員など五十名弱で、皆「応援団」の気持ちだという。

現在、活動の中心は札幌市内の小金湯近くの農場となっている。伊達で順調にすすんでいた人材育成事業とは別に札幌市内に土地を借りて農場を開設することには周囲の反対もあった。しかし、長谷川さんは何がなんでも札幌でやりたかった。当初、農村地域でおこなっていた研修プログラムは、なかなか人が集まらず苦労したが、札幌なら人口が多い分、農業へ強い関心を持つ人も多いはずと考えたからだ。もちろん大消費地としての価



国道沿いの大きな看板が小金湯農場の入り口

北海道の元気! NPO訪問

14 NPO法人 農業塾風のがっこう

文・加藤知美

値も大きい。実際、研修生の募集に対して一〇〇人を超える問い合わせがあり、多様な人材が確保できた。特に去年あたりからは、雇用対策として農業や介護の分野への期待が高まっており、研修生への給付金付きの研修など、助成金や補助金を利用した農業分野の人材育成に追い風が吹いている。これにあわせ、ビニールハウスの資材や研修用の教室、農業機械など設備投資を重点的におこなっているため、一過性のムーブメントで終わることなく、この先も農業に関わる人材の育成が地道にすすめられるであろう。

人材育成にあたっては、長谷川さんの今までのあらゆる経験が引き込まれている。研修に特化したNPOとして運営するために、他のNPOと連携して事務作業を軽減したり、中間支援NPOのサポートを受けたっている。「NPO同士ならお互い支えあって気持ちよくなれる」ということだ。そうしたネットワークの効用もあって、最近では毎日のように農場の草取りに来てくれるボランティアもいて、長谷川さんは、いろいろな人に支えられて初めてできることがあることを実感しているという。



農業を守るために人材育成に情熱を傾ける長谷川豊先生

◇ 農業の裾野を拡げ活性化を図る

研修は一〇月まで続き、収穫された農産物は、「北のめぐみ愛食フェア」（現サッポロ・マルシェ）などで販売する予定だ。長谷川さん自身が企画運営にかかわる「北のめぐみ愛食フェア」は、道庁赤れんが前などで、生産者が産地や食材の情報を提供しながら、消費者の方々と対面販売により直接交流する週末型産直市だ。従来、農業者はもっぱら生産に取り組み、加工や販売はそれぞれの専門家がするものとされてきた。しかし、自分がつくったものを自分で売ることが、消費者との信頼関係に結びつく。また、農産物をそのまま販売するのは、新たな雇用や産業を生み出すことにはならない。加工したりして付加価値をつけ、安全・安心でおいしいものを提供することで、さまざまなかわりもできる。

当初、農業の担い手を育てたい一心で始めた農業塾だったが、最近では、農業に関連した多様な仕事に就労を広げることも大事な活動となっている。農産物の加工や直売をはじめ、こだわり野菜を使った料理を提供するレストラン、IT技術を活用したネットでの販売、農村体験や滞在型観光を推進するグリーンツーリズムのコーディネートなど実にさまざまな農業にまつわる仕事がある。失われたつづつある農村の文化や歴史を守るためにも、こうした農業に関連した様々な職業に若者が就くことで、地域を元気にすることにもなる。

近年は食の安全・安心に対する消費者の関心が強くなっている。農業が大事であることにも気づ

き始めた人が多い。農業技術も様々な研修では有機栽培で作物を育てる。研修を終えて農業を始めることになれば、農業を使う慣行栽培を選ぶ人もい

るが、研修だからこそ農業を使わない農業の大変さを経験してもらいたいからだ。

かつて、減反政策が始められた頃、時代は高度経済成長期であり、経済が発展すれば農業は不要になるという極論さえあった。しかし、農業は、単に農畜産物を生産するだけでなく、地域の風土、文化や歴史に密接にかかわり、守るべきものが多い。昔、近所のおじいさん、おばあさんからいろいろな生活の術を教わったように、人と人のつながりを大事にする若い農業者が日本の農業と農村の文化を守っていくことに長谷川さんは大きな期待をかけている。



なだらかな傾斜地に奥まで田畑やハウスが広がる

◆ NPO法人農業塾風のがっこう

所在地 札幌市南区南沢3条2丁目15-5
TEL 011-571-3387